



保健センターだより

落語「いたりきたり」

ご卒業おめでとうございます。皆さんの多くは学生生活を振り返って楽しく、充実した日々を思い出されることだと思います。自分の学生生活を思い出しても、さほど生産的でなく後悔するところも多くあるものの、総じていい時代であったと思います。

他方、皆さんが巣立つ社会の世相は明るくありません。日本国内だけでも、戦後最大級の経済不況、雇用不安、派遣切り、ネットカフェ難民など、社会全体の閉塞感と機能不全に陥った社会の周縁者へのしわ寄せが顕著です。NHKが振り込め詐欺に加担する若者を取り上げていました（『職業“詐欺”増殖する若者犯罪グループ』）。友人、知人をスカウトし、リスクの高い部分で失業者を利用するなど、希望を持っていない者が「弱者」につけ込むという悲しい人間の一面が顔をのぞかせていました。

この世相で、どのように心身の健康を保つのか。大切で困難な課題ですが、肩の力を抜くのも健康法のひとつだと思い、落語の「いたりきたり」を紹介します。これは桂枝雀さん創作のペットのお話です。ペットの「いたりきたり」はいつも出たり入ったりしていますが、一方からみれば「出ている」しもう片方からみれば「入っている」。「でたりはいたり」はいつも行ったり来たりしていますが、あくる朝みるといつも同じ場所にいる。「のらりくらり」は他の生き物と違って、押されると押し返すのではなく押されたら押されたままです。ものの見方は多面的であること、生き物の増長には限りがあること、自分にとって中心を保つのが大事なこと、ひとり一人に持ち場があって持ちつ持

たれつで成り立っていること、などをこの話は教えてくれます。

映画『ディアボロス』は米国を舞台にした若手弁護士の話です。主人公はニューヨークの大手弁護士事務所に役員待遇で迎えられます。職場、住まい、近隣住民など申し分のない生活が始まりますが、次第に、事務所の不正や弁護に当たっている被告人の罪状などが明らかになっていく中で、主人公は、組織が求めるままに弁護活動に忙殺され家族を失います。映画は「虚栄心が人を動かす」という事務所のボスのせりふで終わります。ペットの「いたりきたり」をみるときは違って、今あるバラ色の生活こそがすべてであると考え、「でたりはいたり」とは対照的に、無限の増長を、自分の中心にいるはずの家族を犠牲に追い求め、「のらりくらり」とは違う生き物のように、周りの進言に耳を傾けず、明るみに出てきた事態を見守ることをせず、我を押し通す。虚栄心でかたまると肩の力が抜けないのかもしれない。

健康を損ねたときはもちろん病気の予防・健康管理の上で医療機関の助けが大切なほういまでもありませんが、社会生活の中で肩の力を抜くひとときがもてること、他を顧みることなく我を押し通すようなところが目立たない職場環境に身を置くこと、なども大切だと思います。

社会で活躍する皆さんの健康保健を定める労働安全衛生法は快適な職場環境の促進を謳っています。「いたりきたり」はこのような法が定着する土壌を教えているように思います。

ご活躍を期待しています。